

3月といえば、花粉症の人にとっては辛い季節ですね。私も花粉症ですが、幸いドイツでは発症していません。それもそのはず、ドイツではスギ花粉はほとんど飛んでいないようです。更に嬉しいことに、最近に至る所で花が咲き始め、緑も多く見られるようになりました。サマータイムも始まり日が長くなったので、これから益々過ごしやすくなりそうです。

さて、今月は待ちに待った姉弟との再会がありました。二人にとっては初めてのドイツなので、私が案内役となり、ベルリン、ケルン、デュッセルドルフを訪れました。今回はそれぞれの都市の雰囲気と、旅のなかで感じたことをお伝えしたいと思います。



歴史とアートに包まれるカラフルな街 —ベルリン—

ドイツの首都であるベルリンは、壁の歴史、アートの街として知られています。私たちはハンブルクからバスで3時間かけて行きました。お目当ては、週末に開かれる蚤の市。そこでは、骨頂品をはじめ、若きクリエイターがデザインした品々、様々な国の料理が楽しめる屋台等がありました。そんな中、目を引かれたのは「Japanese Waffle」の文字。覗いてみると、見覚えのあるものが売られていました。「たい焼き」です。味は抹茶&あずきとチョコ&バナナで、迷わず前者を購入。日本のとは少し違った食感ですが、遠く離れたドイツで、（アレンジされつつも）日本のお菓子が人々に受け入れられていることに喜びを感じました。

続いて向かったのはイーストサイドギャラリー。シュプレー川沿いの1km以上に渡り、東西を分断していた壁が残っています。現在壁には、様々な国のアーティストが手掛けたメッセージ性の強いアートが描かれています。壁は想像していたものよりも低く、色鮮やかなアートの効果もあり、一見この壁が当時の人々を、家族や大切な人から引き裂いたなどとは信じられないほどでした。ですが「Denkmal(文化財)」と書かれた像に刻まれた建設、崩壊の年号を見たり、アーティストの言葉を読んだりしていくうちに、悲惨な歴史は確かにここで起こっていたことなのだと実感し始め、胸が痛くなりました。

次回訪れる時は、壁博物館やDDR(東ドイツ)博物館、国会議事堂にも足を運び、自分の目で歴史を学びたいと思います。



ドイツのなかの日本 —デュッセルドルフ—

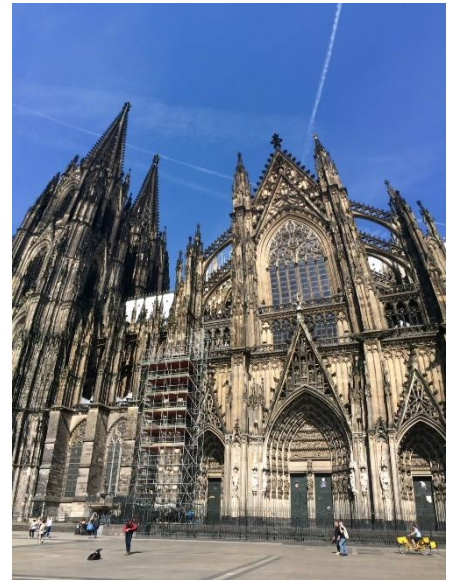
電車で4時間弱かけて、デュッセルドルフで働いている知人を訪問しに行きました。この街には日本の企業が多く進出していることもあり、およそ6千人の日本人が住んでいます。そのため駅を歩いても、よく日本語が聞こえてきますし、日本食レストランやスーパーも充実してい

ます。ハンブルクでは見ることのできない「焼き鳥」「ラーメン」「居酒屋」という文字を見ると、ドイツにいながら日本にいるような感覚になります。今回はあるイベントの顔合わせで訪問したのですが、そのイベントについては来月の報告書にて改めてお伝えします。

圧巻！そびえ立つ大聖堂 —ケルン—

デュッセルドルフから南へ、電車に乗ること30分。最大のゴシック建築である大聖堂を見るために、ケルンに向かいました。駅を出ると、すぐ目の前にケルン大聖堂が姿を現します。その迫力はまるで3D映画を見ているような感覚になるほどで、完全に圧倒されました。中に入り螺旋階段を上がっていくと、装飾の細かい部分が間近で見ることができる上、街を一望できるのでオススメです。

ライン川に掛かる橋を渡り、反対側へ行くとゆったりした空間になっています。川沿いにあるチョコレート博物館では、チョコレートの歴史、作られる工程を学ぶことができます。中にはチョコレートの自動販売機も展示してあり、古くから現代まで、ドイツでチョコレートが親しまれている様子が見て取れました。



ヨーロッパの中において、感じること

最近よく、「自分はアジア人として見られている」と考えさせられることがあります。

ある日レストランに入ったときのこと、店員さんが英語のメニューを渡しながら「(英語) すみません、ドリンクのメニューはドイツ語しかなくて。」と言ってきました。それに対して私が「(独語) 大丈夫です、ドイツ語分かります。」と返すと、相手は「(独語) あ、ごめんなさい。私てっきりー。メニューもドイツ語の方を持ってきました。」と少し気まずそうでした。

観光地に行く場合も大抵は英語で話しかけられ、こちらが頑なにドイツ語を話していても相手は英語、という不思議な場面もたまにあります。私はドイツ語運用能力を高めたい、また現地の言葉話すことで一步踏み込んだ会話ができると感じるので、見た目で判断され、ドイツ語で会話をする機会を失うことに複雑な思いを抱きます。しかし相手の方も親切心で英語を話してくれていると理解できるので、そのような場合にどういった対応をするのか、迷うことがあります。そういった場面に出くわした時に、相手も自分も心地よく会話をするためにはどういった言動をとるのが良いのか、模索しながら自分のスタイルを確立していきたいです。

もちろんアジア人として見られることは、気まずさを生むばかりではありません。以前空港で荷物検査を受けているときに「どこから来たの？」と話しかけられ「日本です。」と答えると、「去年日本に行って桜を見たんだけど、本当に綺麗だったよ。日本は美しい国だね。そして日本人のお客さんはいい人ばかりで嬉しいよ。」と言われたことがありました。そして会話の最後に日本語で「ありがとう。」と言われ、その言葉は身に染みました。

日本にいた時はあまり人種を意識させられることはなかったですが、人種多様なドイツで考えさせられることは多々あります。ここでは「自分」をしっかりと持ちつつ、相手を尊重しながら関わっていくことが不可欠です。そのため私自身、留学当初よりも芯が強くなった上に、他者と関わる際に考慮することが増えてきた、と感じています。